

## サム・シェパードの『地獄の神』が鳴らす警鐘

森 本 道 孝

**要旨** サム・シェパードの『地獄の神』のラストシーンでは、エマがただ一人舞台に残り、家に起こった危機を夫に知らせるためにポーチのベルを鳴らす。彼女の意思に反し、家の中はウェルチによってアメリカへの愛国心を示すもので満たされていくが、これはアメリカ国民が知らぬうちに愛国心を強要されている状況を示す。この劇のタイトルはプルトニウムの語源である地獄神プルートを示すが、この物質の持つ見えざる浸透力はアメリカ国民に蔓延しているアメリカ国家の持つ力への盲目的な信念の忠実なメタファーとなっている。作中でヘインズが言うように、個人と国家の問題の境界は消失し、エマのベルはアメリカ国民の現状への警鐘の役目を担っている。これらの点から、この劇をもってシェパードがより視野を広げ、政治的視点をこれまでより明確に示していることを指摘したい。

**キーワード**：サム・シェパード、『地獄の神』、愛国心、プルトニウム

## Ringing the Alarm Bell in Sam Shepard's *The God of Hell*

Michitaka Morimoto

**Abstract** At the final scene of *The God of Hell* (2005), Emma stays on the stage alone and rings the bell on the porch in order to inform her husband of the crisis in their house. Against her will, her house is filled with the patriotism that is forced by Welch. Like this, American citizens are also forced to have such patriotism before they know it. The title of this play, the god of hell, means Pluto, the origin of plutonium. It is characteristic of plutonium to spread before we know it. Plutonium's invisible power is an accurate metaphor for American citizens who develop a fetish for their country's power. Like Haynes says, the difference between the personal problem and the public one disappear. So, Emma's bell warns against the present situation of American citizens who make a fetish of their power. With this play, Shepard broadens his horizons and shows his political attitude clearly.

**Keywords**: Sam Shepard, *The God of Hell*, patriotism, plutonium

これまでのサム・シェパード (Sam Shepard, 1943- ) の劇作品を俯瞰すると、父親と息子、兄弟間など、男同士の対立を扱い、家族という単位を中心に血縁関係をテーマとする作品群の評価は高いが、90年代以降の作品群の評価は概して芳しくない。ところが、2005年に発表された『地獄の神』(*The God of Hell*) という三場構成の劇は、これまでの彼の劇作品群よりもより政治的メッセージの強い作品となっている。

くわえて注目すべきは、女性登場人物のエマ (Emma) が、家の裏に備え付けられているベルをしきりに鳴らしているという不可解なラストシーンの存在である。本稿では、なぜ彼女がベルを鳴らし続けるというシーンで劇が終わるのか、彼女が鳴らすベルにどんな意味があるのか、ということを中心に、『地獄の神』という作品のもつ意味を探ることにする。

## 1. 強要される愛国心

ヴィレッジ・ヴォイス (*The Village Voice*) に寄せた「愛国者の活動」('Patriot Acts') の中でドン・シーウェイ (Don Shewey) は、戦争に対するシェパードの態度を次のように要約した。

Every time a president named Bush invades Iraq, Sam Shepard writes a play in response. The first one wasn't exactly a tragedy ... the playwright called his 1991 *States of Shock* "a vaudeville nightmare" ... but when history repeated itself, he was determined to approach it the second time as farce. (Shewey; emphasis added)

下線部が示すのは、2004年の『地獄の神』執筆のことであり、彼はブッシュ (Bush) という名の大統領が戦争を起こすたび、演劇を書くという形で戦争に対する自身の考えを明らかにしており、また、その際に貫かれている姿勢は、アメリカ国民の意識に対する危機感を持った態度である。シェパードの戦争観を見るには、1991年の湾岸戦争終結後に初演を迎えた彼の劇作品、『ショック状態』(*States of Shock*) についての彼の考えを取り上げるのが有効である。以下は1991年の「沈黙の言葉：サム・シェパードとのインタビュー」('Silent Tongues': *An Interview with Sam Shepard*) で、『ショック状態』執筆の背景を聞かれ、彼が湾岸戦争について述べている部分である。

I could not believe the systematic kind of insensitivity of it. That there was this punitive attitude ... we're going to just knock these people off the face of the earth. And then it's devastating. Not only that, but they've convinced the

American public that this was a good deed, that this was in fact a heroic ... war, and welcome the heroes back. (Rosen, 235; emphasis added)

ここでシェパードが懸念しているのは、破壊的活動である戦争を、よいことだとし、英雄的なものであると捉えさせられてしまっているアメリカ国民の態度である。

では、そうした彼の戦争観が『地獄の神』ではどのように反映されているのだろうか。作品冒頭でフランク（Frank）とエマという夫婦の家を訪ねるウェルチ（Welch）は、アメリカ国旗を模したクッキーの販売員としてやって来る。彼はクッキーそのものが“American made”（10）であることを繰り返しアピールし、そしてクッキー以外にも、“We have a wide variety of patriotic paraphernalia available”（21）と言い、様々なものを売りつけようとする。その際にもアメリカ国旗の色である“red, white, and blue”（22）という三色を強調し、さらには、彼のスーツの襟の折り返しには、アメリカ国旗のピンがついている。そして彼は、“You’d think there would be a flag or something to that effect. Some sign. Some indication of loyalty and pride.”（19）と言い、たとえば国旗や自由の女神のミニチュアなどがエマの家にはないことを責め立てる。

また、ウェルチは、二度目の訪問の際には、小さなアメリカ国旗のたくさんついた紐を持ってきて、エマたちの家にそれを打ち付けて、家中を国旗だらけにしてしまう。これは国家への忠誠を示すものを何も置いていない彼女らの家を国旗だらけにすることで、眼に見える形で「アメリカ化」し、アメリカへの忠誠を強要していると言える。この点に関して、シーウェイは、「愛国者の活動」の中で、『地獄の神』のもともとのタイトルが、アメリカ支配による平和を意味する『パクス・アメリカーナ』（*Pax Americana*）であったことを挙げ、作品中に描かれる愛国心を“toxic patriotism”と表現し、アメリカ支配によって一見平和に見えているものが実は汚染されたものとして描かれていることを指摘する。そして、シーウェイはさらに、作中で用いられているたくさんの国旗について、シェパードの他の作品にも見られる劇をコミカルにするための働きもあると認めたうえで、次のように言う。

But it also unmistakably refers to the blanketing of red-white-and-blue that turned the country’s outpouring of post-9-11 grief into something bullying and coercive. (Shewey)

これを考えると、ウェルチが打ち付ける国旗がたくさん付いた紐は、赤・白・青の布、つまりはアメリカ国旗そのものを示し、この布で家を覆うことにより、9・11後のアメリカ全体の悲しみを、他者を抑圧する力へと変えることができると考えられる。しかし、この

変換こそが、シェパードが危機感を持っているアメリカ国民の戦争に対する積極性を助長する根拠となってしまうのである。

シェパードは、“We’re being sold a brand-new idea of patriotism. It never occurred to me that patriotism had to be advertised. Patriotism is something you deeply felt.” (Shewey) とも言う。つまり、シェパードの言う愛国心とは『地獄の神』の中でウェルチが行うように、他者によって強要されるものではなく、自身の中から湧き出てくるものであるはずである。そして、作品の最後にウェルチがエマに向かって “You didn’t think you were going to get a free ride on the back of Democracy forever, did you? . . . Sooner or later, the price has to be paid.” (97-98) と言うように、いつまでも資本主義にただ乗りしているわけにはいかず、いつかその付けを払うときが来るのである。

この資本主義のもろさに関してシェパードはさらに次のように述べる。

The sides are being divided now. It’s very obvious. So if you’re on the other side of the fence, you’re suddenly anti-American. It’s breeding fear of being on the wrong side. Democracy’s a very fragile thing. . . . As soon as you stop being responsible to it and allow it to turn into scare tactics, it’s no longer democracy, is it? . . . It may be an inch away from totalitarianism. (Shewey)

ここまで見てきたように、作品内でウェルチがエマたちにアメリカへの愛国心を強要しようとする根本の原因は、シェパードがここで述べている「恐怖心」(fear) に他ならないと言える。こちらかあちらという二者しかない中で、間違った側に行かないために、言い換えれば、「反アメリカ」(anti-American) 側にならないように、アメリカへの愛国心を持つように強要する。そこには、戦争に対するアメリカ国民の態度にシェパードが覚えた危機感を重ね合わせることができる。つまりそれは、戦争に突入しようとも、あるいはどんなことをしようとも、「アメリカこそが正しい側にいる」という思いが、国民の中に広まってしまっている現状に対する危機感なのである。

## 2. プルトニウムの浸透力

次に、作品タイトルの the god of hell という表現が示唆するものについて検証しておく。この言葉が示すのは、作中でヘインズ (Haynes) が説明する通り、地獄神プルト (Pluto) のことであり、これはプルトニウム (Plutonium) という言葉の語源となっている。そして彼は、その性質について以下のように詳しく説明をしていく。

HAYNES. Do you know how long it remains radioactive and biologically dangerous once it's released into the atmosphere?

FRANK. Plutonium?

HAYNES. Yes.

FRANK. No, I don't know anything about it.

HAYNES. Five hundred thousand years.

FRANK. That's too long time.

HAYNES. It is. The most carcinogenic substance known to man. It causes mutations in the genes of the reproductive cells. The eggs and the sperm. Major mutations. A kind of random compulsory genetic engineering that goes on and on and on and on.

FRANK. That would probably affect my heifers then, wouldn't it?

HAYNES. Yes, it would, Frank. It definitely would affect your heifers. It would affect every heifer within six hundred miles of here. It would penetrate the food chain and bio-accumulate thousands of times over, lasting generation after generation. Tasteless, odorless, and invisible. (41-42; emphasis added)

ここではプルトニウムの性質として、下線部にあるように、空中に拡散してしまうと危険であること、人体に蓄積されていくこと、そしてそれが人類の再生産の過程に影響し、何世代にもわたる長期間、悪影響を及ぼし続けることが語られている。つまりは一度感染してしまうと容易には取り除けない厄介な物質としてプルトニウムが説明されているのである。また、精子と卵子という生物の根幹を成すものへの影響が示されていることから、人類の存続そのものへの危機感さえも暗示するものとしてプルトニウムが作品のテーマに採用されていると考えられる。

引用の最後の下線部にある通り、このプルトニウムは味覚・聴覚・視覚では捉えることができないものとされ、これはシェパード劇においてしばしば問題とされる、目に見えないものの影響が徐々に広がっていくことに対する人々の恐怖を如実に示していると言える。たとえば、彼の『見えざる手』(*The Unseen Hand*, 1972) において頭に残される手形のみで姿の見えない存在によって支配される人物たちが示す見えざる力の影響や、『飢えた階級の呪い』(*Curse of the Starving Class*, 1976) における「呪い」(curse) という言葉が示す、見えざるものが人々に与えていく影響を挙げることができる。これらの作品における比喩と同じように、プルトニウムは見えざるものが人々の知らぬ間に彼らの中に浸透していき、大きな影響を与えていくことを効果的に示す手段となっているのである。

また、本作品では秘密の存在であるヘインズはエマの家の地下室に匿われるものの、追っ

手のウェルチの巧みな誘導によって、地下から引きずり出され、秘密は暴露される。この地下への隠蔽と暴露という構図は、シェパード劇には頻出である。たとえば、『埋められた子供』(Buried Child, 1978)においては、近親相姦の結果として生まれたために殺された子供は裏庭に埋められ、ラストシーンで掘り起こされ、秘密は暴露される。プルトニウムの由来が地獄神プルートであり、一般に地獄は地下の世界と考えられていることを考えあわせると、秘密の地下への隠蔽と暴露についての考察と、たとえ地中に埋めようとも影響力を失わないプルトニウムの拡散力には類似性が認められる。つまり、シェパード劇の中では、秘密は地下に埋めようとも隠しきれず、明かされていく運命にあるが、このような秘密の浸透力は、プルトニウムの拡散という比喻でうまく表されているのである。

プルトニウムにはこのほかにも様々な意味が込められている。作品では、プルトニウムの影響で、ヘインズの体からは青色の光を発するように描かれる。彼がエマと初対面の挨拶をする場面では、エマの手がヘインズの手に触れるや否や、そこから青い閃光が飛び出す。この後、ヘインズは静電気のせいだと言い訳をするが、これが単なる静電気ではなく、彼が受けたと考えられる、おそらくプルトニウムに関わる何らかの科学実験の結果、青い閃光を放つことになっているのは、読者あるいは観客にとっては明らかである。また、彼はこの症状について、“It gets worse and worse each year.” (31) とも言うが、これはすでに見た長年にわたって継続していくプルトニウムの悪影響を思わせる症状になっている。さらに、エマはヘインズの体から光を放つ症状を“not normal” (53) だと問題視する。

そして、以下の引用に明らかなように、この症状はさらに彼と接したフランクへ感染していく。

FRANK. Don't touch me! I'm contaminated!

EMMA. What?

FRANK. You didn't believe that static shock business, did you? He's [Haynes] a carrier. He was sent here to do us in.

EMMA. Sent here? Who would have sent him? I thought he was your friend?

FRANK. He's a traitor! He's betrayed us all. A pretender. They look like us. They act like us. But underneath they're deadly. (82; emphasis added)

ここで明らかなように、フランクもプルトニウムの影響を受けてしまい、体から青い光を発するようになっている。下線部にある通り、彼はヘインズがまるで保菌者のように現れて、自分に感染させたと考えていることがわかる。彼によると、友人だと思っていたヘインズが実は裏切り者で、外見は自分たちと同じように装い、振舞っているが、その下の中身は致命的なものだと言う。つまりは、ヘインズは見た目では感染はわからないものの、

体内にプルトニウムの影響を受けていて、それはすでに周囲に感染していく力を持っているということがここからわかる。また、これは目に見えないプルトニウムが知らぬ間に拡大していく恐怖を示している。さらに、別の場面ではヘインズ自身もこのプルトニウムの感染源となっていることをウェルチから指摘され、周囲にいる友人や、周囲の地域にまでも感染が拡大してしまう危険性をはらんでいるのだと言われている。これが現実となり、フランクにうつしてしまうのである。

ここで指摘しておくべきなのは、プルトニウムの浸透力が見えざるものの影響力の比喩として描かれているということである。本来、プルトニウムの影響を受けた人物に誰かが接触をしたとしても、その人物がそれに感染し拡大するということはないはずである。しかし、この劇の中ではプルトニウムの影響力は、接触を介して拡大していくものとして描かれている。この理由として考えられるのは、核への関心が高まっている現代において、見えざるものの影響力を最も効果的に示すものとして、プルトニウムを利用したいという思惑がある一方で、劇中にそれを表すのは困難であるという問題があるということである。つまり、見えざるものの影響力を、眼に見える形で劇中に採用しないことには、観客にとって理解しがたいものになってしまうのである。そこで、本来のプルトニウムの性質とずれるものの、プルトニウムが接触により感染していくことを比喩的に表すことで劇的效果を高めていると言える。さらにはプルトニウムの影響を受けた人物たちが青い光を放つようになっていることも同じ理由であると考えられる。青い光もまた、プルトニウムの感染の拡大を観客にわかりやすい形で提示するための舞台上の効果的な演出であると言える。

さて、プルトニウムの影響を受けたフランクの変化に関しては、第三場冒頭に明らかである。ここでフランクはこれまでとは大きく異なり、第二場まで見知らぬ存在であったはずのウェルチと同じ服装、持ち物で登場する。彼は所有していた牛を彼に売ってしまい、代わりにウェルチの持ち物をもらったのだと言う。しかし、彼のより重要な変化は、“*he walks very bowlegged and sore as though something terrible has happened to his genitalia.*” (77) と描かれるように、彼の性器に起こっている。この描写は第三場でのヘインズと奇妙なつながりを見せている。第二場の最後に、ヘインズが追っ手ウェルチと対面し、かつての実験の話をされ、辛い記憶が蘇っている場面がある。その実験で男性器に与えられた苦痛の話をされた途端、ヘインズは自身の股間を掴み、苦しみ出し、そこからは青い閃光が放たれる。そして彼はそのままの休勢で固まってしまい、しばらく動けない。そして、第三場では、ヘインズとともに地下室にいたウェルチは黒い電気コードを引っ張りながら階段を上ってきて、その下には何か重いものが結びついているようであると描写される。エマの台詞から、地下でコードにつながれているのは、ヘインズの男性器であることがわかり、ウェルチがコードに付いたスイッチを入れるたびに、ヘインズは地下で叫び声をあげる。この状態が、彼が恐れるかつて実験と同じものであることは容易に推測でき、そして、こ

の状況を見たフランクもまた、彼と同様に自身の股間を掴み、ただ固まって動けずにいる。ここにも彼ら二人の行動が類似していく様子が見て取れる。

さらには、ウェルチはエマにコードの端を持ってこないかと提案するが、彼女は拒否する。その際、彼はヘインズのことを“a well-behaved dog” (90) と表現するが、実際、コードにつながれたヘインズは苦痛のせいで彼に従うしかなく、“a trained dog” (91) のように“Sit!” (91) という命令に従い、彼の前にひざまずくしかない。そして、このように、どちらもプルトニウムによって影響を受けたと考えられる男性二人、ヘインズとフランクは類似性を示し、ついにはウェルチの命令で二人そろってステップを踏むことを強要される。そのステップは次第に一致していき、最後には“*the two of them getting more and more in sync.*” (96) と描写されるほどに同調していく。

フランクは第三場冒頭でウェルチの衣装をまもって登場したために、ウェルチのいる支配側に付くのかと思われたが、それは外見を変化させただけであり、中身はプルトニウム感染者である被害者ヘインズと類似していき、ついにはまるで彼と一体化したかのように描写される。これは先に見た引用で、フランクがヘインズを批判して、外見はみんなと同じだが中身は裏切り者だと言っていたことがここで反転し、フランク自身もまた、外見はウェルチ側へと変化したように見せておきながら、中身は感染者ヘインズ側へと変わってしまったことを示していると言える。つまりは、これらの男性登場人物達は、外見と中身が不一致である物として描かれているのである。

さらに興味深いのは、このプルトニウムによる影響が、エマがこれまで育てていた植物にも及んでいくことである。その経緯を追うと、第一場の終わりで、すでに感染者であったヘインズが、エマが育てていた植物に触れるとまたもや青い光を放つ。結局、この接触が原因で、作品のラストシーンで植物が青い光を放つようになってしまうのだが、さらに注目すべきは、最初にヘインズが触れたのは“one of the plants” (43) であったにもかかわらず、最後のシーンで光を放っているのは、“plants” (98) と複数形になっていることである。つまり、ヘインズから植物へというだけでなく、一本の植物から全ての植物へも感染が広がってしまったということであり、ここからもプルトニウムの感染力の強さが伺える。

さらには、シェパードの『世界が緑だった頃』(When the World Was Green, 1997) という短い劇のタイトルの時制がwasと過去形であることから読み取れるような、すでに「緑」(green) でなくなってしまった世界への彼の関心は、『地獄の神』の中でのフランクの以下のような発言とリンクする。

FRANK. It's times like this you remember the world was perfect once.  
Absolutely perfect. Powder blue skies. Hawks circling over the bottom



fields. The rich smell of fresh-cut alfalfa laying in lazy wind rows. The gentle bawling of spring calves calling to their mothers. I miss the Cold War so much. (91; emphasis added)

引用の最初の下線部の表現は先に見た劇のタイトルと同様に過去形が用いられ、すでになくなってしまったものへの関心を示す。これに加え、最後の下線部にある「冷戦の時代が恋しい」という部分に注目すると、世界を完璧でなくしたのは、冷戦時代終結と時を同じくする湾岸戦争、さらには後の対イラク戦争へのアメリカの猛進であると言いたいと考えられる。冷戦期は、大きな枠での対立構造はあり、常にそれがいつ動き出すかという恐怖感はあるものの、現状としては対立構造が互いに牽制し合い、構造そのものが動くことなかった。しかし、一旦その構造が壊れ、動きが始まったことにより、世界は完璧ではなくなり、様々な問題が生じてきたと言える。

さらに、すでに見たように、作品の中でアメリカ国旗への言及を多用するなど、しきりに読者、あるいは観客に、アメリカという国家に対する意識を持たせようとしていることを考え合わせると、シェパードはこの作品において、あらゆるものに悪影響を与えていく見えざるプルトニウムの恐怖を扱うことで、アメリカ国民が知らぬ間に侵されている盲目的なアメリカ崇拜のみならず、アメリカが世界に与えている影響の大きさを示しているのだと考えられる。つまり、プルトニウムが描き出す影響力は、アメリカ国民に向かうものと、アメリカから世界へと向かうものという二つの方向性を持っている。

### 3. 残される女性が鳴らすベル

さて、この作品においては、男性人物中心であったこれまでのシェパード作品に比べると女性登場人物であるエマの役割が大きい。作品冒頭から夫フランクは不在で、侵入者ウェルチと対峙し、地下に隠れる逃亡者ヘインズを匿おうと奮闘するのは彼女一人である。危機的な場面では必ず夫のフランクは不在で役に立たない。彼女が特別な存在として描かれていることの証拠として、彼女だけがプルトニウムの感染から逃れていることを挙げることができる。すでに見たように、男性登場人物や植物までもが、接触により次々とプルトニウムの影響を受け、青い光を放つようになっていくにもかかわらず、接触をしているのに彼女だけは青い光を放つことはない。プルトニウムの性質についてヘインズが説明した引用にあった通り、プルトニウムは精子と卵子両方に影響を与えるものとして描かれているにもかかわらず、彼女は逃れる。つまり、彼女は作品の最後まで残って、やり遂げるべき役割のある人物として描かれているのである。

また、この作品ではベルの音が強調して描かれており、そこには何かの意味がある。描かれるのは玄関のドアベルと裏のポーチにあるベルの二種類である。合計二回あるウェル

チの訪問の際には、玄関のドアベルの描写が強調されるが、これらはいずれも家の中にいる人物にとって、突然で、驚かせるもので、結果として家の中にいる人物たちがまごついてしまう。また、二回の訪問では、ドアベルは二度ずつ鳴らされ、この計4回のドアベルはいずれも、ヘインズの追っ手ウェルチという不吉な存在が鳴らしている点から、この作品の中でのベルの音は不吉さの象徴であると捉えてよい。しかし、不吉な存在の到来を知らせるドアベルが鳴ったにもかかわらず、エマはウェルチの侵入を許し、秘密の隠蔽に失敗してしまうので、このベルは結果として役には立っていない。

さて、それではこの『地獄の神』という劇の結末部分の意味は何だろうか。すでに見たように、結末部分では、青い光を発していることで植物にさえもブルトニウムの感染が拡大したことが明らかである中、エマは必死に裏のポーチにあるベルを鳴らし続ける。このポーチのベルは作品冒頭の説明によると “a black cast-iron school bell hangs from the porch ceiling on a short rope” (3) である。

*She [EMMA] watches WELCH cross past the window outside and disappear off left. She runs out on the porch and rings the old school bell for FRANK. . . . She comes back into the house, pauses, and looks around, slightly stunned, trying to figure out the whole encounter with WELCH. She goes back out on porch and rings bell again. (23; emphasis added)*

これは第一場で、初めてやってきたウェルチを何とか追い返した後に、牛に餌をやりに行つて家を離れている夫に、家の異変を知らせようと、このポーチのベルを鳴らしている場面である。つまり、このポーチのベルは、家の中に何か異変があった際に鳴らされるものとしての役割を持っているのだが、この音は夫には届かず、問題の解決にはならないので、結果としてこのベルも役には立たない。ラストシーンにおいてもこのベルは夫には届かないまま、劇は終わる。

ただ、ここで注目したいのは、女性登場人物エマがラストシーンにただ一人残り、必死にベルを鳴らすというシーンで劇が幕を迎えているということである。ここで確認しておくが、シェパード劇の結末には、男性が舞台上を去った後に女性が残るという光景が目立つということである。たとえば、『心の嘘』(A Lie of the Mind, 1985) は、ラストシーンで母と娘が思い出の写真を焼くという場面で終わり、『フール・フォア・ラブ』(Fool for Love, 1984) では、兄であり近親相姦的恋人であったエディー (Eddie) が去った後に妹メイ (May) が一人残るなど、女性が劇の最後に残るという例がいくつか見られる。このように、女性人物が最後に残るとするのはシェパード劇でもこれまでにすでに見られた光景である。

しかし、この作品でエマに託された役割はこれまでの作品においてよりも大きい。注目

すべきなのは、作品冒頭から強調されている植物の水やりに関する描写である。彼女は何度もシンクに水を汲みに行っては、自分が育てている植物に水をやり続ける。これを見た夫フランクや客人ヘインズらには、植物を溺れさせてしまうとは思わないのかと繰り返し聞かれるほどの執拗さである。これは単に彼女が植物を育てるのが好きだということを示すだけでなく、より重要な意味を持っているように思われる。フランクのセリフ “the world was perfect once” (91) とともに先に検証したシェパードの別作品のタイトル *When the World Was Green* において暗示されているかつて緑であった世界への回帰願望を、彼女の水遣り行動が示していると考えられる。つまりは緑を育てることがかつての完璧であったはずの世界への回帰を目指していると捉えることができるのである。

さらに、彼女のこの行動の重要性は、彼女によって水を与えられる存在がもう一つあることを考えるとよくわかる。それは第三場で股間を電気コードにつながれるという拷問に遭っているヘインズである。苦しんでいる彼に対して、エマは水を与えてやろうとするが、この水遣りはすでに見たような従順な犬のような印象を与えるヘインズの描写と矛盾するものではなく、緑の復活を願う植物の水遣り行動と同じく、彼の回復を願う行動となっている。

しかし、この電気コードが男性器につながっていることをさらに突き詰めて考えると、人間の種の一つである精子を含む性器に長いコードがつながっていて、それがウェルチによって地下から引っ張り出されてきたことは、まるで植物が地面から引っっこ抜かれているかのような印象さえ与える。つまり、この第三場でのヘインズは犬のように従順な存在としてだけでなく、エマに育てられている植物と同じく、水を与えられるだけで抵抗することもできずに引っ張り抜かれてしまう植物と化しているとも考えられる。このように考えると、エマの水遣りの描写が繰り返されることには、ヘインズと植物を同一視させるという役目があると言える。そして、彼女の植物とヘインズを同様にコントロールするというこの行為は、女性人物による作品の展開への影響力を如実に示す。さらにこれは、男性登場人物を中心に劇を展開してきたこれまでのシェパードの劇作品群における女性人物の役割における変化を効果的に示している。

さらに、彼女の最も重要な役割は、作品のラストシーンでベルを鳴らす役目であるが、彼女が必死にベルを鳴らしているにもかかわらず、夫フランクは戻ってくる気配すらなく、ただベルの音が鳴り響くだけで、作品は結末を迎えてしまう。ここまでの考察を踏まえると、危機感をつのらせたエマが最後の場面で必死に鳴らすこのポーチにあるベルは、目には見えないプルトニウムの感染力が示唆するアメリカ国民の盲目的アメリカ崇拜と、戦争への言及が示唆するようにアメリカという国家が世界に与えつつある影響力の大きさに対する、文字通りの警鐘の役目を担うと考えてよいと言える。ここではもはや作品の中で、今置かれている状況を「危機」(crisis) だと表現したところ、フランクから “Are you

talking about a world situation or something personal?” (39) と聞かれたヘインズが “What’s the difference?” (39) と答えたことが示すように、個人の問題と世界の問題の間に差はなくなっていて、エマが最後に示す危機感は、そのままアメリカ国民が直面している危機感であると考えてよい。つまりは、彼女の鳴らすベルはアメリカそのものへの警鐘の役目を担っていると言える。

## 結 論

以上のように考えると、『地獄の神』という劇は、秘密の地下への隠蔽とその失敗、そして、女性登場人物が残されて語るという結末などという、シェパードの従来 of 劇作の特徴を備えている。これに加え、作品タイトルとも深くかかわりのあるプルトニウムを作品の中に入れ込むことで、目に見えないものの恐怖をより鮮明に描き出している。そして、これらの手法を駆使しつつ、戦争を正当化するかのような反応をし、盲目的にアメリカを崇拝しているアメリカ国民に警鐘を鳴らすべく、エマにベルを鳴らさせて劇を終える。これらは戦争に猛進するアメリカに批判的なシェパードの態度を如実に示している。つまり、『地獄の神』において、シェパードはこれまでの家族を中心とした比較的狭い範囲のテーマからさらに視野を広げ、アメリカという国家全体の抱える問題を中心に据えている点で、より政治性の強い作品としており、彼の作品群の中でも一つの到達点として評価できるものになっている。

## 引 用 文 献

- Rosen, Carol. (2004). *Sam Shepard: A 'Poetic Rodeo'*. New York: Palgrave Macmillan.
- Roudané, Matthew, ed. (2002). *The Cambridge Companion to Sam Shepard*. Cambridge: Cambridge UP.
- Shepard, Sam. (1987). *A Lie of the Mind and The War in Heaven*. New York: New American Library.
- Shepard, Sam. (2005). *The God of Hell*. New York: Vintage.
- Shepard, Sam. (1984). *Seven Plays*. 1981. New York: Bantam.
- Shepard, Sam. (1993). *States of Shock, Far North, Silent Tongue*. New York: Vintage.
- Shepard, Sam. (2002). *The Late Henry Moss, Eyes for Consuela, When the World Was Green*. New York: Random House.
- Shewey, Don. (2004). 'Patriot Acts.' *The Village Voice*. Nov. 9, 2004.  
 〈<http://www.villagevoice.com/2004-11-09/news/patriot-acts/>〉